慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	労働の二重性とその展開
Sub Title	
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1948
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.41, No.1/2 (1948. 2) ,p.1- 18
JaLC DOI	10.14991/001.19480201-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19480201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高橋誠一郎著

經濟學史略

A五判　價三二〇圓　〒一五圓

（新刊）

「本書は、著者が是れ迄公にした經濟思想史及經濟學史に關する可なりに數多い著作及論稿の中から、拔撰補塡して西洋經濟學發達の概略を叙し、併せて之れが我が國傳來の跡を顧眄しようとしたものである。」（序文の一節）―斯くの如く、本書は希臘・羅馬の太古から、經濟學傳來の跡を辿つて、官房學者・重農學派の前驅的理論より、巨星アダム・スミス現はれてマルサス、リカアドオ、ミルの絢爛たる古典學派の開花となり、一方、初期佛蘭西のそれよりラサール、マルクスの科學的のそれに至る迄の社會主義を檢討して、講壇社會主義、基督教社會主義に及び、限界效用學派、墺太利學派、數理學派の三大學的財とそれを相續した現代經濟學に到り、終の一篇はフィッセリング以來の西洋經濟學の日本移植とそれの今日迄の發展を叙して筆を收めた。本文五五七頁、書名註一六頁、人名索引一一頁學界多年待望の高橋先生の一貫せる經濟學史は遂に出來た。

慶應出版社

勞働の二重性とその展開

遊部久藏

（一）

「一者の分裂とそれの矛盾に滿ちた部分の認識とは辯證法の眞髓である。」（註一）とレーニンは述べている。蓋し自然、精神及び社會のあらゆる現象や過程を對立物の統一として、即ち相互に矛盾し排除し合う對立的傾向として認識することこそ、世界の一切の道程をその「自己運動」において、その自生的發展において認識するための前提であるから、換言すれば、「發展は對立の『闘爭』である。」（註二）から、である。

そして「近代社會の經濟的運動法則を暴露すること」をその「最後の窮極目的」とする「資本論」は先ず商品の分析を以て端緒する。何故なら資本制社會にとつては勞働生産物の商品形態或いは價値形態が經濟的な細胞形態――この社會における生産の最も一般的な且つ最も未展開な形態――であるがゆえに「資本論」の端緒をなすが、これよりのちの敍述は商品の分析によつて得られた最初の對立物の統一の運動過程、生長過程を追求せるものに外ならぬ。要するに端緒としての商品分析のうちに鏡に照らす如くに現代社會の一切の矛盾がその萠芽形態において明らかにされているのである。かくして「近代社會の經濟的運動法則」は自己運動として、矛盾に充ちた相互に排斥し闘爭し合う對

立物の統一過程（運動過程）として把握されている。いわゆる「價値法則」とは實にかくの如き意味での「資本論」全三卷をつらぬく根本的運動法則、一本の赤き糸を指すべきである。「資本論」全體はかゝる意味での價値法則の辯證法的發展を追求したものである。價値法則は決して今日まで誤まり解されたかの如き、單なる商品價値論（「資本論」第一卷第一篇第一章特に第一、二節）を指すものでもなければ、もとより勞働價値說の一種を稱するものでもない。したがつて價値法則をば通常の經濟學における如き價値論と同一の方法的意義（全經濟理論の出發點、前提、基礎）に解したり、ましてやそれをスミス＝リカードォ流の勞働價値說と同一の理論的平面に於いて論ずるが如きは全くの虛妄の說である。いまこの點を詳論するいとまはないが、辯證法的經濟學としての「資本論」の特殊な方法的立場は今日においても否却て今日においてこそ一層强調力言される必要がある。（註三）

さて端緒として商品とくにその交換關係がとられたが、この分析によつて得られた最初の對立は周知の如く使用價値と交換價値との對立であり、そして分析がすゝむにつれて交換價値は價値の現象形態であることが判明しかくして根本的對立は使用價値と價値との對立として先ず定立される。だがこれは商品分析の第一段階である。（第一卷第一篇第一章第一節、商品の二要因——使用價値および價値）分析は更にすゝむ。かくして統一物としての商品の分析によつて得られた使用價値と價値との對立は實は使用價値をつくる具體的・有用的勞働と價値をつくる抽象的・一般的勞働との對立との表現にほかならぬことが檢出される。（同、第二節商品で表示される勞働の二重性）——尤も敍述の上では勞働の二重性の檢出は部分的には第一節においても行われており、またこゝでの敍述の順序は研究の順序と逆行していることがあらためて注意さるべきである。（註四）

勞働の二重性の發見の劃期的意義についてはマルクス自身各所で述べている。先づそれの彼の學說體系の上で占める重要性については次の如く述べられている。即ち「資本論」の勞働の二重性の節の冒頭において「商品に含まれている勞働のかかる二者鬪爭的な本性は、私により初めて批判的に證明されたものである。この點は經濟學を理解するための樞軸であるから、ここに、より詳細に闡明することとしよう。」（註五）エンゲルス宛一八六七年八月二四日附書簡（「資本論」第一版刊行の年）において「僕の著書における最良の部分は、（一）（諸事實の徹底的理解は、この上に立たなければ不可能である。）眞先に第一章に出てくるところの勞働の二重性、——それによつて勞働は使用價値或は交換價値として顯現する——である。」（註六）またエンゲルス宛一八六八年一月八日附書簡において「資本論」のもつ「三つの根本的に新しい要素」の一つとして、勞働の二者鬪爭性をあげ、「實にこの點が批判的見解の全秘密である。」（註七）とも云つている。

また勞働の二重性の發見定立の經濟學史上における意義については「經濟學批判中において次の如く論ぜられている。曰く「商品を二重の形態の勞働に分析すること、すなはちその使用價値を現實の勞働または合目的的な・生產的な・活動に、交換價値を勞働時間または平等な・社會的な・勞働に、分析することは、古典經濟學——イギリスにおいてはサリアム・ペティに、フランスにおいてはボァギュベールに始まり、イギリスにおいてはリカアドォに、フランスにおいてはシスモンディに終りし古典經濟學——の一世紀半以上に亙れる諸研究の批判によつて得られた終局的結果である。」（註八）そして古典經濟學の根本的缺陷を勞働の二重性についてうすうす感付いてはいたが、これを自覺的にとりあげなかつたことであると述べている。即ち「價値一般に關して云へば、古典經濟學は、價値において表示される勞働をその生產物の使用價値において表示されるかぎりでの同じ勞働から、何所においてもはつきりとは、且つ明白な意識をもつては、區別してゐない。それは、もちろん、この區別を事實的にやつてはゐる、といふわけは、

それは勞働をば、時には量的に、時には質的に考察してゐるからである。だが、それが氣づかなかつたことは、諸勞働の單に量的な區別は、それらの質的な統一あるひは同等性をかくして抽象的・人間的勞働へのそれらの還元を、前提するといふことである。」（註九）

かくしてマルクスは古典經濟學が自覺的にはとりあげ得なかつた勞働の二重性をはじめて意識的に自己の經濟學體系の據つて立つ基礎として採用したのであるが、かゝることが可能であつたのは、先ず商品の二因子の分析において使用價値と價値との對立をギリギリのところまで追いつめて、例えば使用價値をば商品體と看做すが如くに、これをその論理的尖端に於いて把え得たからである。（註一〇）されば古典經濟學が勞働の二重性を確立し得なかつたのは初發において商品の二因子を明確に對立においてつかむことができなかつたからである。（註一一）

こゝに勞働の二重性の發見、定立（及びこれに基く資本主義社會の經濟的運動法則の闡明）のかゞやかしい意義があらためて確認されねばならない。それはまさにコペルニクスの地動說やニュートンの引力の法則にも比すべき經濟史上の劃期的發見であつた否それにとゞまらず、それによつてはじめて共產主義は「プロレタリア解放の條件についての理論」（註一二）たり得たのである。エンゲルスは云つている。「、、二大發見、即ち唯物史觀と、剩餘價値に依る資本家的生產の秘密の暴露とは、實に我々がマルクスに負ふ所である。社會主義は之に依つて一個の科學となつた。」あとは只主として、その細目と諸關係とを完成するだけの事であつた。」（註一三）そして剩餘價値の理論が勞働の二重性の定立にその直接の基礎を有することは後論（第三節）にみる如くである。

（註一）「哲學ノート」、廣島・直井兩氏譯、三四一頁。

（註二）同上、三四二頁。

（註三）價値法則をかくの如く廣義に「資本論」全體の研究對象たる「近代社會の經濟的運動法則」と解することは今日まで全く何びとによつてもなされなかつたところである。それは單に「資本論」劈頭の商品價値論として狹義に解されているにすぎぬ。エンゲルスがそうである。（「資本論」、第三卷序文、及び「資本論第三卷補遺」參照）マルクス自身においてもこの點は文章の上で明確ではない。彼はかの有名なクーゲルマン宛一八六八年七月一一日附書簡において「科學は、價値法則が如何に自らを貫徹するかを說明することのうちに、正に成り立つ。」（マルクス・エンゲルス全集、第二一卷、七一頁）と云つてこれを運動法則として把え、劈頭の商品價値論によつて得られた法則は「價値規定」Wertbestimmung 又は「價値法則一般」Wertgesetz überhaupt と呼んで「價値法則」Wertgesetz と區別しているかの如くである。（「價値規定」の語は例えば「資本論」第一卷第六篇第一七章、第三卷第七篇第四九章第五〇章等に出ず、「價値法則一般」の語は例えば第三卷第六篇第三七章に出ず。）が彼はまた同時に他の箇所で單純な、未發展の段階にある價値法則――即ち價値規定と本來呼ばるべきもの――をとくにことわらずに價値法則と呼んでおり、そのことは多くの引用によつて示しうる。（例えば第三卷第二篇第一〇章）しかしかゝる場合におけるそれは決して固定的な定義にとどまる如きあるいは基礎、前提、擬制の如き意義での價値法則ではなく、たえず發展進化する法則の未發展の段階にあるものとしての意である。されば我々は一般にこの語に接したとき、かくの如き全體的發展法則乃至はその最初の規定として解すべきである。（繰返して云えば價値法則の最初の段階が價値規定である。）なおこの點に關する文義的、學說史的穿索は別稿に期す。

（註四）勞働の二重性は第二節で詳論されているが、それは第一節においてもすでにしばしば「蒸溜法」によるといわれる商品の箇所において論ぜられている。即ち商品からその使用價値を捨象すると、殘るものはそれが勞働生產物だという共通の屬性だけであるが、この勞働生產物たるや一切の感性的形狀をおびた有用的性格が捨象されていゝしたがつて商品價値の實體（Substanz）としての勞働は有用的性格の捨象され一切の具體的形態の消失した「抽象的・人間的勞働」であるというくだりを想起せよとゝにすでに使用價値との對立が勞働の二者鬪爭性の顯現に外ならぬことが暗示されている。またとゝでの敍述の順序と論理の順序とが逆行していることは云うまでもない。マルクス自身「もちろん、敍述の仕方は、形式的には、研究の仕方と區別されねばならぬ。（「資本論」、第二版えの跋）とことわつている。論理的には勞働の二重性の檢出が商品の二因子に先行して定立されている。また使用價値と價値との對立にもとずいて、使用價値と交換價値との現象上の對立が見出されている。けれども敍述の順序は全く右と逆行し遡及法がとられている。だが商品（資本的生產の細胞形態）における原初的對立

が勞働の二重性であることは云うまでもない。なおこの點の論理的方法上の意義については、武市健人市氏著「ヘーゲル論理學の世界」上卷、二二六頁以下參照。

（註五）「資本論」、第一卷、長谷部氏譯、一八五頁。

（註六）「マル・エン全集」、第一卷、第一九卷、三八九頁。

（註七）同、第二〇卷、一二頁。

（註八）「經濟學批判」、河上・宮川兩氏譯、一二二頁。

（註九）「資本論」、第一卷、前揭譯、二六九頁。

（註一〇）三枝博音氏著「資本論の辯證法」、六二頁。

（註一一）しかるに安部隆一氏はスミスリカードオの「客觀的價値學說」がすでに使用價値と交換價値とを對立においてとらえていると云つて彼等とマルクスとの絕對的隔絕に關してのべられていない。（「使用價値について」、「經濟思潮」第五集、昭和二二年一〇月）だがスミスやリカードオは使用價値と交換價値實は價値との對立をわずかに水や空氣とダイヤモンドや金との間の如き例外的事例にみられる使用價値と交換價値との量的不釣合として考察したにすぎない。即ちスミス氏曰く「最大の使用價値を有つものにして、往々、交換價値を殆ど又は全くもたないものがある、これに反して、最大の交換價値をもつものにして、往々、殆ど又は全く使用價値をもたないものがある。水ほど大切なものはないけれども、これを以ては何物も買ふわけにはいかない、これと交換には何物をも獲ることはできない。これに反し、ダイヤモンドは殆ど何等の使用價値をもたないけれども、それと交換に、往々、他の貨物の大量を獲ることができる。」（「國富論」、第一篇、第四章、岩波文庫譯、第一冊、六五頁）更にリカードオは「經濟學及び課稅の原理」第一章第一節冒頭において右のスミスの文句をそのまゝ引用し、水及び空氣と金とについて使用價値と交換價値との不比例を說き、「されば、利用は交換價値に取つて絕對的に缺くべからざるものではあるが、其尺度ではない。」（岩波文庫譯、七頁）と云つているにすぎない。使用價値と交換價値との對立を質と量、商品體と（一見偶然的相對的な）交換比率――窮極においては幻のような對象性たる抽象的勞働＝價値との對立としてみることはもとより彼等のおもいもよらないところであつた。そしてこのことこそ彼等をして勞働の二重性の索出を怠らしめた所以である。

なお安部氏の右の論文は敗戰後あらわれた價値論關係の唯一のよみごたえある論文であるが、氏の主張たる使用價値即物觀は、かなり無理があり、マルクス經濟學の一歪曲である。いまこの點の詳細の批判は別稿にゆずるとして本論の趣旨を明かにする上に必要な程度に若干言を費すとしよう。

なるほどマルクスは「ある物の有用性はその物を使用價値たらしめる。だがこの有用性は空中に浮んでゐない。それは商品體の諸屬性によつて制約されてゐて、商品體なしには實存しない。だから鐵・小麥・ダイヤモンド・等々の如き商品體そのものが、一の使用價値あるひは財である。」（「資本論」、第一卷、一七三頁）と云つている。そして安部氏の云われるように使用價値としての商品を考察するに際して先ず「商品はさしあたり、その諸屬性によつて人間の何らかの種類の諸欲望を充たすところの、一の外的對象・一つの物・である。」（同、一七一頁）と述べでもいる。しかし以上の言葉は要するに使用價値が物をはなれては存しないということを强調するために力言されたにとどまり、使用價値が依然物の屬性によつて制約された效用であることを否定するものではない。この點、「資本論」からの前揭引用文の前後を熟讀すればわかる筈であり、また安部氏の批判された河上肇氏の見解の方がむしろ正しいように思われる。（「資本論入門」、第一分冊）されば使用價値は前述の如く效用として一面商品――物の側の諸條件によつて制約されつつ一面人間の側の諸欲望をはなれては存し得ない。それはいわばかくの如き意味において物と人間との間の關係を表現する。だからマルクスは云うではないか。「『文義的觀察者』、ペイリー等は價値なる言葉は物に屬せる性質を表すものとなして居る。それは事實上元來は物の人に對する使用價値、即ち物をして人に對して有用且つ快きものたらしめる所の、物の性質以外の何物をも表現しない。、、、使用價値は物と人との間の自然的關係即ち物の人に對する定有を表現する。」（「制剩價値學說史」、第三卷、カウツキー版、第四冊、三五五頁、「マル・エン全集」第一一卷、三五三頁）特に最後の一句に注目せよ。Dergebrauchswert drückt die Naturbeziehung zwischen Dingen und Menschen aus, das Daseinder Dinge für die Menschen. 使用價値は定有であり、したがつて措定された有である。しからば措定するものは何か？　それは物の諸屬性であり更には人間の諸欲望、換言すれば人間の諸欲望の對應關係におかれた物の諸屬性である。氏の如く使用價値即物觀に固執されると、商品價値の實體の索出に際して商品から使用價値を捨象することはとりもなおさず商品そのものを捨象することになりはしないか？　蓋し氏によれば使用價値は商品體、物そのものであるとして一義的にとられているから。（ちなみにマルクスは「商品體の使用價値を捨象すれば」と云つている。安部氏はこれを「商品體の商品體を捨象すれば」と讀まれるのか？）かゝる氏の見解を以てしては商品にふくまれた資本制生產の諸矛盾の原初形態としての二つの對立物たる使用價値と價値、及び勞働の二重性は把握しがたい。したがつて氏もまた「價値法則」の展開を以て「資本論」の內容とみられるかのような口吻をもらすが、しかもそれを結局簡單な商品價値の規定と解するらしく、この結果使用價値が絕えずこの價値法則の展開の一方の極に立つことが見落されている。（一一一、一一三頁）氏はすゝんで使用價値を物とみることによつて主觀的價値學說はくつがえるし、その客觀的價値學說――マルクスの體系も氏によ

つてこれに編入されている——に對する批判もとゝにあらためて再出發しなければならぬと斷じているが（一二〇頁）、そうではなくして主觀的價値學説の誤謬は使用價値と（交換）價値との對立性を最初からみとめず兩者を調和——使用價値による（交換）價値の説明——せしめるべく試みた點にある。總じて安部氏に缺けているものは辯證法的理解である。氏はゴットルから影響を蒙つたと自ら告白されている。曰く「……物の有用性ないし效用によつて、その物が使用價値であると、特に力説せしめるにいたつたのは、われわれの個人的な理解の過程を云へば、『資本論』の敍述そのものではなく、却つてゴットルの理論であつた。」（一〇四頁）なお安部氏の批判については本論第三節の（註二五）參照。

（註一二）エンゲルス著「共產主義原則」、マ・エ全集」、第三卷、四〇七頁）。

（註一三）エンゲルス著「空想的社會主義と科學的社會主義」、「マ・エ全集」、第一二卷、五六三頁。

（二）

しからば「資本論」は如何に勞働の二重性の辯證法的展開を追求しているか？　だがこゝで先ず簡單に勞働の二重性の何たるかを述べるとする。

A　綜括　商品の生產に際して、勞働は、一方では、合目的的な・有用的な、特殊的形態における人間的勞働力の支出であり、かゝるものとしてそれは使用價値を創造する。しかるに勞働は、他方では、生理學的な意味での人間的勞働力の支出として同等な人間的勞働或いは抽象的・人間的勞働であり、かゝるものとしてそれは商品價値を創造する。

商品に含まれている勞働は、使用價値に關聯しては質的にのみ意味をもつが、價値の大きさに關聯しては、それは質としてはもはや「質のどん詰まりとしての人間的勞働」（menschliche Arbeit ohne Weitere Qualität）以上のものを有たず、したがつて量的にのみ意義をもつ。

されば使用價値に關聯しては勞働の如何にして及び如何なる（Wie Und Was）ということが問題であるか、商品價値に關聯しては勞働のどれだけ（Wieviel）ということが、換言すればその時間的繼續が問題である。

使用價値としての商品は有用的勞働と自然的素材との結合したものである。——人間と自然との間の物質代謝＝質料變換。ウリアム・ペティのいわゆる「勞働は富の父であり土地はその母である。」しかるに一方、價値としての商品は單なる同等な種類の勞働凝結である。

B　使用價値と價値との二律背反（對立的運動）——一定時間に得られる使用價値と價値との量的不比例（逆比例）——は、勞働の二者鬪爭的性格から、すゝんでは生產力（の變動）が有用的勞働とのみ關係することから、生ずる。生產力なるものは元來、有用的・具體的な勞働の生產力であつて、それは一定時間内における合目的的・生產的な活動の作用度を規定する。したがつて、勞働生產力の變動→有用的勞働の作用度の變動→使用價値（生產物）量の變動。（正比例の關係）

しかるに生產力の變動は價値で表示される抽象的勞働とは「絶對的に全く無關係」である。蓋し價値において勞働の具體的・有用的な形態が捨象されるや否や、勞働の具體的・有用的形態に屬する生產力（その大きさ及び變動）も又捨象される。だから同じ勞働は、生產力が如何に變動しようとも、同じ時間内には常に同じ大きさの價値を生み出す。

で、生產力の增大によつて使用價値、量を增大せしめ得るにしても、いまもしこれが勞働時間の減少をともなえば、價値量は減少する。（個々の使用價値の價値はもちろん減少する。）逆に生產力の低下によつて使用價値量を減少せしめるにしても、いまもしこれが勞働時間の增大をともなえば、價値量は增大する。（個々の使用價値の價値は

増大する。）

C「勞働の二重性」――價値という範疇――の歴史性

使用價値を創造する勞働、有用的勞働は人間と自然との間の物質代謝をいとなみ、それは「富の父」である。かゝる勞働はすべての社會形態から獨立せる、人類生存のための自然的條件である。（そして使用價値の超歴史性＝超社會性がこれと關聯する。）しかるに價値を創造する勞働、抽象的勞働は、勞働のある特殊的な社會的形態である。それは一つの社會關係に屬する。

されば、自給自足――無交換の農民の自然經濟においては、使用價値は生産されるが、價値は生産されない。「富の父」としての有用的勞働は、フリードリッヒ・リストも認めるように「既にソロモン王がアダス・スミスよりも遙か以前に考へついたことである。」（註一四）しかし問題はむしろ古代のソロモン王が價値を生産する抽象的勞働――古代にも商品生産が存したかぎり――に氣付き得なかつたということである。

だから、商品價値を創造する勞働は生理的意味での人間的勞働力の支出（人間の腦髓、筋肉、神經、手、等々の生産的な支出）として等質性をもつているというだけでは、なおそれは價値において自己の表現を見出すとはいえない。即ちこれがためには分業と私有財産とを根底とする商品生産という一定の社會關係が、しかもその相當程度の普及が前提されねばならぬ。かゝる社會においてのみ、はじめて生理學的な意味での等質的勞働が價値を形成し、かくして「商品の二因子」に對應するところの「勞働の二重性」が確立する。（單なる等質的勞働は古代の農民自然經濟にもあつた。）何故か？　蓋し商品生産のかなりの支配下においてのみ、はじめて「一定種類の勞働に對する無關心」が生じ）これは資本主義社會において勞働の選擇及び移動の自由とともに完成される）、そして價値を形成するものとしての「抽象的勞働」という範疇はその現實的客觀的基礎をもつのである。

要するに價値をつくる抽象的勞働、したがつて商品において統一されたる勞働の二者鬪爭性は、商品生産特にその完成としての資本制生産という一定の社會關係を基礎としてはじめて成立する。いわばそれはかゝる社會關係の表現である。（これはまた、「資本論」劈頭の商品の性質に關聯してくる。）（註一五）

（註一四）「國民經濟學體系」、改造文庫譯、上卷、二二七頁。なおマルクスは次のように註して曰く「フリードリヒ・リストは、有用なるものの・すなはち使用價値の・創造を助けるかぎりでの勞働と、富のある一定の社會的形態を・すなはち交換價値を・創造するかぎりでの勞働と・の間の差異を理解することができなかつた。けだし彼れの主我的な實際的な頭には總じて理解するといふことは緣の遠いことであつたから。そこで彼れは近代の英國の經濟學者たちはエジプトのモーゼの單なる剽竊者にすぎないと考へた。」（「經濟學批判」、九五頁）

（註一五）價値（對象性）は「純粹に社會的なもの」である。（「資本論」、第一卷、一九八――九頁、二二〇頁）それは「超自然的な屬性」である。（二二〇頁）「一の歴史的に規定された發展時代」が、勞働生産物を商品に轉化し、一の使用物の生産において支出された勞働をその使用物の價値として表示せしめる。（二三〇頁）商品にとつて價値對象性はその「社會的な定有」である。（二四一頁）

三

しからば、前節にみた如き「經濟學を理解するための樞軸」としての勞働の二重性は、更に「資本論」の敍述のすゝむにつれて如何に展開・具體化していつたか？　いまこれを詳論するを得ないが、最も基本的な部面についてこゝにそのいくつかを論ずるとしよう。

一　商品から貨幣への轉化（「資本論」第一卷、第一篇、第一、二、三章）

商品の二因子、使用價値と價値との對立が勞働の二重性、具體的・有用的勞働と抽象的・一般的勞働との顯現であ

ることはすでにみたところであるが、しかるに商品の一般的に流通するにつれて次第に使用價値と價値との對立は商品の體外にその表現を見出す。即ち商品のうちにあつた價値は商品から自己疎外して貨幣のうちに自己の定有を獲得する。かくして商品のうちにふくまれていた使用價値と價値との對立は商品と貨幣との對立えと外化する。（註一六）

二　勞働過程と價値形成＝增殖過程（「資本論」第一卷、第三篇、第五章）

商品は貨幣に轉化したが、更に貨幣は剩餘價値を生産することによつて資本に轉化する。しかるに剩餘價値の生産は生産過程における勞働過程と價値形成＝增殖過程との對立を基礎にして行われる。

勞働過程　勞働者は自己の勞働を商品において表示するためには彼は先ずそれを使用價値において表示せねばならぬ。だから資本家が勞働者に製作させるのは特定の使用價値＝財である。しかるに使用價値＝財の本性よりして、その生産は、したがつて勞働過程は、特定の社會的形態から獨立している。それは人間と自然との間の物質代謝である。（こゝで第二節の具體的勞働の項を想起せよ。）――尤も資本家のための勞働過程は次の二つの獨自性、即ち

（一）資本家の統制　（二）生産物の資本家えの歸屬という獨自性をもつている。

價値形成＝增殖過程　だが資本家は使用價値の生産を自己目的として使用價値を生産するものではない。使用價値は交換價値の物質的基礎即ち擔い手としてのみ生産される。されば資本家は（一）一定量の價値を有する商品を生産しようと欲し、しかも（二）その生産のために必要とされる諸商品の價値總額よりもより大きな價値を有する商品を、したがつて價値ばかりでなく剩餘價値をも生産しようと欲する。

我々はすでに幾度も商品そのものが勞働の二重性の顯現としての使用價値と價値との統一であると述べたが、これと對應して商品の生産過程が勞働過程と價値形成＝增殖過程との統一であることをみる。即ち一方勞働過程において作用する勞働は使用價値を生産するところの有用的勞働であつて、その運動は、質的に考察され、その特殊的な仕方樣式において考察され、目的及び內容の側面から考察される。が、他方價値形成＝增殖過程において作用する勞働は抽象的勞働であつて、その運動は量的にのみ考察され、問題なのは勞働がその作業に要する時間だけである。

「ひとは見る、――さきに商品の分析から得られたところの、使用價値を創造するかぎりでの勞働と價値を創造するかぎりでの同じ勞働との間の區別は、いまや、生産過程の相異なる側面の區別として現はれといふことを。勞働過程と價値形成過程との統一としては、生産過程は商品の生産過程である。勞働過程と價値增殖過程との統一としては、それは資本制生産過程であり、商品生産の資本制的形態である。」（註一七）

三　不變資本と可變資本。「同じ時點における勞働の成果の二面性」、即ち生産過程における舊價値維持と新價値附加。（「資本論」第一卷、第三篇、第六章）

生産過程において勞働は一方その具體的・特殊的・有用的な屬性（使用價値をつくる有用的勞働）においては、生産手段の價値を生産物に委讓し、生産物において維持し、他方その抽象的・一般的な屬性（價値をつくる抽象的勞働）においては、生産手段の價値に新價値を附加する。

詳言すれば、勞働の二重性からその成果（生産物價値の形成）の右に述べた如き二面性が生ずる。そして、この成果は二重の勞働の結果ではなく、新價値附加と同時に舊價値委讓が行われる。（イ）舊價値委讓は具體的勞働の結果である。蓋し棉花と紡錘、絲と織機、鐵と鐵砧、のそれぞれの價値が綿絲、綿織物、鐵器に委讓されるのは、紡績、機織り、鍛冶という特定の勞働過程を離れては不可能である。しかるに（ロ）生産手段の價値えの新價値附加は、特定の具體的・有用的勞働の結果ではなくして、抽象的勞働の結果である。蓋し紡績勞働者は鍛冶工となつても彼はや

はり一勞働日によつて彼の材料に新價値を附加するであろうから。だから、紡績勞働者の勞働は、その抽象的・一般的な屬性においては、人間的勞働力の支出としては、棉花と紡錘との價値に新價値を附加し、そして、紡績過程としてのその具體的・特殊的・有用的な屬性においては、それはこれらの生産手段の價値を生産物に委讓し、かくしてそれらの價値を生産物において維持する。同じ時點における勞働の成果の二面性はかようにして生ずるのである。

「勞働の單に量的な附加によつて、新價値が附加され、附加された勞働の質によつて、諸生産手段の舊諸價値が生産物において維持される。同じ勞働の――それの二面的な性格の結果たる――この二面的な作用は、種々の現象の上に手にとるやうに現はれる。」（註一八）

そして資本の不變資本及び可變資本えの區別は生産過程の一面としての價値增殖過程の立場からなされるところである。曰く「勞働過程の立場からは、客體的および主體的諸要因として・すなはち諸生産手段および勞働力として・區別されるところの同じ資本構成諸部分が、價値增殖過程の立場からは、不變資本および可變資本として區別される。」（註一九）

なおこれに關聯して資本の有機的構成における技術的構成と價値構成との統一も含蓄深く理解さるべきである。即ち資本の技術的構成とは生産過程で機能する質料の側面からみられた生産手段と勞働力とえの資本の分割の比例――充用される生産手段の分量と他方ではその充用のために必要な勞働量との間の比率を意味し、資本の價値構成とは價値の側面からみられた不變資本または生産手段の價値と可變資本または勞働力の價値即ち賃銀の總額とえの資本の分割の比例を意味するが、前者が勞働過程に、後者が價値形成＝增殖過程に照應し且しそれぞれを反映していることは明らかであろう。マルクスは、「私は、資本の技術的構成によつて規定され且つその諸變化を反映する限りでの資本の價値構成をば、資本の有機的構成と名づける。」（註二〇）と云つているが、かゝる意味での資本の有機的構成が勞働過程と價値形成＝增殖過程との統一としての生産過程に照應し且つ關係することは云うまでもなかろう。

四、素材視點と價値視點。〔「資本論」第二卷、第三篇〕

マルクスによる社會的總資本の再生産の分析はこの問題に關するケネーの「經濟表」以來の最大の業績であり、「極めて重要にして且つ獨創的なもの」（註二一）であると稱されている。しかもこの理論の「基礎的前提」（註二二）たるものが、この分析における二つの立場――素材視點と價値視點――であることは周知の如くである。マルクスは再生産論の冒頭に述べて云う。「當面の目的からいへば、再生産過程はW′を組成する右部分の價値代置（Wertersatz）並びに素材代置（Stoffersatz）の立場から觀察せらるべきである。」（註二三）即ち素材代置とは社會的總生産物をその現物形態にしたがつて、（一）生産手段生産部門、（二）消費資料生産部門の二部門に分けることを意味し、又價値視點とはこれらの部門の各々における生産物をその價値の要素にしたがつて（一）不變資本（C）、（二）可變資本（V）、（三）剩餘價値（M）の三部分に分けることを意味する。そして今こゝにあらためてかゝる二重の視點が勞働の二重性の一層の具體化、擴充にほかならぬことを銘記すべきである。即ち簡單なる商品の分析によつて得られた商品の二因子――勞働の二重性の檢出こそ、社會的總資本の再生産並びに流通を分析するための立脚地をあたえたのである。この場合、有用的勞働――使用價値が二部門分割（素材視點）に、抽象的勞働――價値がC＋V＋M分割（價値視點）にそれぞれ照應し合うことは明らかであろう。されぱこそ「資本論」の著者自身が、勞働の二重性に關して「諸事實の徹底的理解は、この上に立たなければ不可能である」と稱した所以である。（註二四）

抽象的勞働の對象化によつて市場價値（更に市場價値の一層の具體化としての生産價格）はつくられるが、それが市場價格として實現しうるためには、一方その商品にふくまれた具體的勞働の有用性が證明されなければならない。かく抽象的勞働と具體的勞働とは對立しつゝ、しかも販賣換言すれば市場價値の實現（市場價格の成立）過程において統一されている。

使用價値の實現は消費によつて行われるが、使用價値をつくる勞働の有用性は交換（販賣）によつて證明され、又その過程は同時に抽象的勞働（價値）の實現する過程でもある。かようにして使用價値と價値と、又有用的勞働と抽象的勞働とは絡み合いつゝ交換過程において統一されている。この統一はもしも商品が販賣されない場合卽ち使用價値の證明が社會的に行われないとき、特に過剩生産恐慌において破られる。矛盾は尖鋭な形態をとつて發現するが、しかも恐慌はこの矛盾を强力的に統一する。かゝる商品價値の實現における勞働の二重性の展開が三でみた社會的總生産物の再生産――それは一面においては社會的總生産物價値の實現過程でもある――と關聯し合うことは云うまでもなかろう。（註二五）

上來論じた勞働の二重性の具體化の諸事例は「資本論」中の代表的のものについて極めて簡單にみたところである。問題はむしろそれらの事例にみられた勞働の二者鬪爭的性格の具體化が如何に相互に關聯しつゝ然も枝となり細分化して「資本論」全體を構成しているかということであるが、かゝる根本的問題についてはいまこゝに詳論する準備も餘裕をもたない。小稿はたゞ勞働の二重性とその展開を素描し、その學問的意義を反省したまでである。價値法則の眞の認識えの出發はかくして可能とされるであろうが、價値法則獨特の意義の學說史的、方法論的再考察は更に續稿において試みる所存である。

（註一六）貨幣の成立を價値形態の必然的な發展によるものとして說くのがマルクスの貨幣論の著しい特徵であることは云うまでもないが、それは價値形態それ自身が商品に內含される矛盾を外的に表示するからである。例えば簡單な價値形態に關して述べて曰く「商品のうちに包みこまれてゐる使用價値と價値との內的對立は、一の外的對立によつて、すなはち、二つの商品の關係――そこでは、それの價値が表現さるべき一方の商品は直接には使用價値としてのみ意義をもち、それで價値が表現される他方の商品はこれに反して直接には交換價値としてのみ意義をもつところの、二つの商品の關係――によつて、表示される。」（「資本論」、第一卷、三二九頁）しかるにヒルファーディング、カウツキー等の貨幣論の根本的誤謬は貨幣成立の必然性を價値形態の發展からひいては商品の二因子――勞働の二重性から說き得なかつたことである。ヒルファーディングについては、「金融資本論」第一篇、第二章、貨幣の必然性カウツキーについては、Sozialdemokratische Bemerkungen zur Uebergangswirtschaft, Leipzig. 1918. 第七章貨幣、參照。

（註一七）「資本論」、第一卷、五一七――八頁。なお價値の實體が抽象的勞働であることが檢出されるのは單に第一節のいわゆる蒸溜法（商品からの使用價値＝勞働の具體性の捨象）によるものと考えるためにしばしばマルクス批判者のみならず解說者によつてもこの點が誤解されやすい。價値の實體としての抽象的勞働は生産過程における勞動過程と價値形式＝增殖過程との統一の立場より遡及して考察されることによつて却て正しく把握されうる。

（註一八）「資本論」、第一卷、一一五頁。

（註一九）同、一三二――三頁。

（註二〇）同、一三六五――六頁。

（註二一）レーニン著「カール・マルクスとその學說」、ナウカ社刊、二三頁。

（註二二）レーニン著、河野重弘氏譯「市場の理論」、二四頁。

（註二三）「資本論」、第二卷、改造社版、三五二頁。

（註二四）なお素材規點を生産力表現、價値點を生産關係表現と看做す山田盛太郎氏（「再生産過程表式分析序論」）に對する豐田四郎氏の批判（資本蓄積論の課題」「中央公論」昭和二二年六月）及び豐田氏に對する安部隆一氏の批判（「最近『資本主義論爭』の報告と討論」「時論」同一〇月、一九――二五頁）がある。

（註二五）商品價値の實現過程（販賣）における勞働の二重性の統一についてはすでに「資本論」第一卷の若干箇所においてもより抽象的にではあるが述べられている。例えば第一篇第三章交換過程、において曰く「、、、諸商品は、みずからを諸

價値として實現しうる前に諸使用價値たる實を示さねばならぬ。けだし、それらに支出された人間の勞働は、それが他人にとつて有用な形態で支出されてゐる限りでのみ計算に這入るからである。ところが、それが他人に有用であるか否か、從つて、それの生産物が他人の諸欲望を充たすか否かは、ただ諸商品の交換のみがこれを證明することができる。」（二八二――三頁）また、同じく第三章第二節流通手段の箇所で「市場の胃の腑」の問題として提起されていることも記憶されるところであらう。（三二七頁）なおこゝから商品價値を規定する「社會的必要勞働時間」の「社會的必要」を以て必要の方面をも顧慮せるものと看做す見解がうまれやすいが、その妄見たることは再説するまでもない。かゝる妄見においては價値（市場價値）の成立と價値の實現（市場價格の成立）との間の過程上の差異――一方は生産過程、一方は流通過程――が無規され、又使用價値と價値、有用的勞働と抽象的勞働との對立が抹殺されそれらが「調和」されてしまう兩者はそれぞれ統一物であつて同一物ではない。統一は對立の上に立ち「調和」とは異る。しかもかゝる謬解は今日に至るも跡をたゝぬ。（高田保馬氏著「勞働價値説の吟味」、四五頁。高橋正雄氏「マルクス」「日本政經研究」昭和二二年七月、六二頁）奇とすべきである。なお安部隆一氏の使用價値即物觀（本論第一節註二參照）の非辯證法的性格よりしては到底市場價値の實現過程における使用價値との對立・統一は理解されることはできぬ。これ又、一面的認見とすべきである。

一九四八―一―一四

俵ふるひ　内藤光備著

解題

幸田成友

本書は林若吉氏の遺書賣立に際し、自分の入手した半紙判寫本で、本文三十一丁前附一丁後附三丁計三十五丁より成る。本文は漢字片假名交りで毎半丁十四行、一行二十五六字より三十二三字に至る。文字拙劣言ふに足らずといへども、本書脱稿後僅々二年餘に抄寫せるものなることは、轉寫の都度に増加の傾ある誤謬を少からしめたと稱して宜からう。筆者は凉竹陣人とあるだけで氏名未詳、鶴府城の南麓松月亭で執筆せる旨識語に見えるから、或は羽前國鶴ヶ岡の住人か。

著者内藤光備字は子興は柳がもとのあるじと稱し、御代官の手代を職としたことは、本書の序跋によつて容易に知られるが、それ以上の經歴は不分明である。同人の自序に「串江の吏隱」とあり、串江は地名らしく思はれるが、それが今の何れの地に當るか考へ得ぬ。

著者の字は子興であり、さうして柳がもとのあるじに漢字を宛てれば松下亭となる。筆者凉竹陣人が字を子成、號を松月亭といつたことは、識語の末にある三箇の朱印の第三と第一とによつて證明せられる。兩者の間に何等かの關係がありはせぬかとの想像がそれからそれへと馳せる。然し我等は妄りに想像を逞しうしてはならぬ。飽くまで史實